《 連絡・情報提供先　090-4269-0965　hagi1922@tcp-ip.or.jp 磯津環境学校情報室 》

何とも激しくせつない

トルストイの原作「アンナ・カレーニナ」の映画を観ました。

今までもヴィヴィアン・リーやグレタ・ガルボが演じたというアンナをイギリスの若きキーラ・ナイトレイが初々しく激しく演じ、新しい劇場型の作品に仕上がっていました。分厚い世界文学全集でなかなか読めなかったストーリーを映画で一気に感じてしまいました。

とりわけ、舞踏会での二人の踊り、その色艶やかな手と身体の動きは激しく燃え上がるその後を見事に象徴していました。

ついでにトルストイの勉強まですることになってしまいました。大地主の父、公爵家の母、三人の兄と一人の妹。三番目の兄は売春婦と同棲し、この物語のニコライのモデルになっています。

二歳で母を亡くし、九歳で父も亡くし、容姿にコンプレックスを持ち、大学に失望しては酒食にふけり、ルソーに傾倒して農民の啓蒙を企てて失敗しては放蕩した若き頃。

トルストイは妻ソフィアとの間に13人の子どもがいますが、私有財産を否定し農民大衆の中に入ろうとして誠実な求道者として生きたのだそうです。

そのトルストイの生き様と当時の社会への批判ははこの『アンナ・カレーニナ』の中に何人もの人を介して描かれていました。レーヴィンの思想のとらえ方はトルストイの一部分を投影していると思います。

ともあれ、大作を映画化してこの短時間（と言っても2時間余）で見せる（魅せる）のに十分成功していると思います。列車事故の伏線やアンナの破滅過程も原作通り極めてリアリズムに即して展開し、観る者を必然的に引っ張っていると思います。

生気にあふれ愛無しでは生きていけぬ美しい女が二十以上も年の違う冷ややかな男と愛無く政略結婚させられ、美男に出逢い恋に落ちる。しかし、その先は幸せであれと願う聴衆には不安ながらもどんどんやりきれない結末に引き込まれていく。それがトルストイの自然主義の描き方なのですね。

編集後記

▼いそかんが4年目に入ります。最近、過去の磯津通信を見ることがありました。大したこと書いてないなと思いました。

▼ボートピアは白紙に戻りました。たくさんのご心配いただいた皆さん、ありがとうございました。

▼そのボートピア問題の過程で胸の内を聞かせてくださった連合自治会長さんが一旦は辞職され、再び町づくりの舵取りをされます。

▼その楠の町づくりの一つの部会「心のうるおい部会」を先日傍聴させていただきました。

▼ステキな女性たちがリードし，経験者が支え、ムードメーカーが取組をポジティブに進めるいい会で、とても勉強になりました。

▼実は、私も推されてとうとう地元石薬師町北町の自治会長になってしまいました。これも地元の方々と関われるチャンスをいただいたと思っています。